

分かっているのに

「あっ、これだ。すごい、本当にあった。ノゾミちゃんのブログだ。」

マキの声を聞き、ミュキは急いでパソコンの画面をのぞきこんだ。今日は、マキの家でグループ研究の調べものをしたあと、いっしょに遊ぶことになっていたのだ。

「えっ、何。ブログって。」

「えっとね。インターネットの中の日記みたいな感じかな。いろんな人に見てもらおうの。ほら、見た人は、コメントも書きこめるんだよ。」

画面をもう一度見てみると、その日の夕飯の写真や、見たテレビの感想などが書いてあって、たしかに日記のようだった。

「ね、わたしたちもコメントしてあげようよ。ええっと、『はじめて見たよ。すごいね。マキ☆ミュキ』と、これでいいや。」

マキがポンとキーをおすと、ブログの画面に文字が表示された。

「すごい。書きこめた。」

「さ、調べものの続きをしようよ。ノゾミちゃんの分もがんばらないと。」

「うん。明日はノゾミちゃん、来られるといいね。」

そう言いながら、ミュキも続きに取りかかった。

次の日、ミュキが学校に登校すると、ノゾミとマキの様子がふだんとちがっている。いつもはいっしょに話をしていて、登校したミュキをむかえてくれるのに、今朝はおたがいに別の友達と話している。ミュキはそれとなくマキに話しかけてみた。

「おはよう、マキちゃん。ノゾミちゃんにブログ見たこと、話してみた。」すると、マキはおこつて言った。

「ねえ、聞いてよ。今日こそ、いっしょに調べものをして、そのあと遊ぼうってさそつたのに、ノゾミちゃん、今日はほかの子と遊ぶ約束してたんだって。グループ研究の発表まで時間ないのに。ほかの子と遊んだりブログしたりするひまがあったら、手伝ってくれたらいいのに。ひどいよね。」マキのあまりの言いように、ミュキはただだまっつてうなずいた。

放課後、二人はマキの家で調べものの続きを始めた。ふとマキが見ている画面を見ると、ノゾミのブログがうつし出されていた。

「あれ、マキちゃん、また、ノゾミちゃんのブログ見てるの。」

「ちよつとコメントを書きこもうと思っけさ。『あんたなんか、知らない』って。」

パタパタとキーボードをたたくマキを見て、ミュキはあわてて言った。

「ちよつ、ちよつと。そんなこと書いていいの。おこられるよ。」

「名前書かなかったら、だれが書いたかなんて分からないわよ。だって、ノゾミちゃんが悪いんじゃない。何。ミュキちゃん、ノゾミちゃんの味方するの。」

「え、ちがうよ。そうじゃなくて。でも……。」
マキがポンとキーをおした。文字がブログに書きこまれる。ミュキは何も

言えず、じっと画面を見つめていた。

家に帰ってからも、マキの家でのがずっとミュキの頭からはなれなかった。思い出すと、心ぞうがドキドキして、いてもたってもいられなくなる。とうとう、ミュキは母のところへ行った。

「ねえ、あのさ、お母さん。こんな話聞いたんだけど、どう思う。」

聞き終えた母は、しばらくじっとミュキを見つめ、やさしく言った。

「もう少しだったのね。」

「え……何のこと言ってるの……お母さん……。」

(お母さん、わたしのことってすぐ分かったんだ……どうしておこらないの。)

そのとき、ミュキは母の気持ち何となく伝わってきたような気がした。

「何が正しいのか分かっているのに、できなかったこと、お母さんにもあったわ……。」

ほほえみながら母は言った。ミュキは、そんな母の笑顔を見てみると、何だかあたたかい元気みたいものが心の底の方にわいてきたことを感じた。

「ねえ、ノゾミちゃん、まだあやまってこないね。もうちょっときついこと、書いちゃおうか。」

次の日の放課後、いっしょにしていた宿題の手を止めたマキがそう言った。ノゾミのブログのページを開き、マキはパタパタとキーボードをたたき始めた。ミュキの心ぞうがドクンと鳴った。

(こんなのだめだ。でも、言ったら……。)

考えただけで手がふるえてきた。

「よし、これでオッケー。」

マキがキーをおそうとしたとき、昨日の母の笑顔が頭の中にかんじた。

(……分かってるのに、できなかったこと、お母さんにもあったわ……。)

ミュキはふるえる手でマキの手をつかんで言った。

「だめだよ、マキちゃん。どっちの味方とかじやなくて、やっぱりだめだよ。」

自分でもおどろくほど大きな声が出た。ものすごいスピードで心ぞうが鳴っている。けれど、その手はもうふるえていなかった。



○ 何も言えず、じっと画面を見つめながら、ミュキはどんなことを考えていたでしょう。

○ マキの手をつかんで「やっぱりだめだよ」と言ったとき、ミュキはどんなことを思っていたでしょう。

